1959年1月31日第3種郵便物認可

週刊 うたごえ新聞

7／1 (1991年) NO. 1357

THE SINGING VOICE OF JAPAN
日本のうたごえ全国協議会機関紙
うたごえ新聞社
〒169 東京都新宿区大久保2—16—36
☎03(3209)0638 FAX 03(3200)0105
振替口座 東京2-5631 毎週月曜日発行
1部120円・税4円(〒26円)・月480円・税15円(〒120円)

『私は元気』と確かめながら

佐々木愛さん（女優）に聞く

「ときめきインタビュー」今月はこの人・女優の佐々木愛さん。瞳の奥に秘めた情熱。創立四十九年の劇団文化座代表。「越後つついし親不知」で芸術祭大賞、今年上演の「荷車の歌」では広島市民劇場女優賞、倉敷市民劇場の最優秀女優賞受賞。「地から湧いたようなお芝居を提供したい」がモットーの文化座。女優・佐々木さんに聞いてみました。

インタビュアーはお会いするのはこれが二回目と、まさにときめきの時、中島修一氏（東京のうたごえ事務局長）。

中島 はじめまして、いや、僕が佐々木さんにお会いするのは実は二回目なんです。二十年以上前になりますが、僕が日本電気精器に勤めていた頃、映画「沖縄」の上映と合わせて、僕らの職場に来ていただいたことがあるんです。職場の先輩の娘さんが元文化座だったこともあり僕は勝手に親近感をもってまして（笑い）。今日は楽しみにしてきました。よろしくお願いします。

佐々木 まあ。そうだったんですか、こちらこそ。

中島 まず、女優として一番大事にしておられることと言いますと？

○○～ 瑞々しい感性が勝負

佐々木 芸術というのはなんでもそうなんでしょうが、瑞々しい感性というのが勝負だと思うんです。やる人間の感性がなくなってしまうとおもしろくないものになってしまうでしょ。

今、自分の抱えているものと同時に常にもう一方の自分の目で、「今の私は元気かなぁ」と確かめる。どっかで、視野が狭くなっていかないように心を配るようにしているんですよ。

なんていうのかなぁ、自分がよく見えてきちゃうと、感性って鈍くなりがちですから、できるだけいい作品に触れる、友人、知人と話をする。毎日、周りの俳優たちに囲まれて生活してますから、できるだけ他の友人と。例えば、お酒を飲んだりする時はなるべく違う世界の人と接するとか。そういういろんなバリエーションに対応していくこと自体がすでに非常に刺激的なことでしょ。

そういう意味では今の世の中の動きを知ることもそうですね。

中島 とくにどんなことを？

○○～ 今、ニュースがおもしろい

佐々木 ソ連のバルト三国の独立問題もですし…。私、二十四年前、ソビエトでの世界平和友好祭に文化の方から参加したんです。その時の友人がちょうど今、日本に来ていることもあるんですが。

あの時（平和友好祭）、ソ連も全国から来てまして、たくさんの民族の人たちがソビエトにいることに驚きました。そしてその時思ったのは、そういう民族の人たちが、ひとつの国のなかで共存するということは、難しいことなんだろうと、なんとなく思ったんですよね。

で、そう聞いてみると「いや、そんなことはない。うまくいってる」ということでした。しかし、今の事態。日本でも最近まで、バルト三国の戦前に遡った歴史はあまり知らされてませんでしたよね。

（4、5面につづく）

▲中島修一氏

プロフィール

佐々木愛（ささき・あい）＝女優 1943年、演出家・佐佐木隆、女優・鈴木光枝の長女として東京に生まれる。私立和光学園高校を卒業後、劇団文化座に入座。

初舞台は山代巴作「荷車の歌」。劇団の代表作ともなった「土」（長塚節作）のおつぎ役で一躍女優としての評価を高め、この作品は全国公演三百ステージ余りを数えた。

'78年度作品「サンダカン八番娼館」（山崎朋子原作）で文化庁芸術祭優秀賞を受賞。'82年度には「越後つついし親不知」（水上勉作、木村光一演出）で作品が文化庁芸術祭大賞を、さらに佐々木愛はおしんの演技に対し、紀ノ国屋演劇賞を受賞した。

最近では、反核をテーマとした「千羽鶴」を企画。また、朗読劇「この子たちの夏」にも出演。女優の立場から積極的に反核、平和への発言を行なっている。

家庭では一男一女の母。

ふめんだい

たてつづけに三本の映画を観る。一本目はパス。が、黒澤明の「八月の狂詩曲」、ケビン・コスナーの「ダンス・ウィズ・ウルブス」は強烈なショック。

☆ ★ ☆

共通するのは現代に問いかける歴史の証言。「ダンス……」はインディアンを征服していくアメリカの歴史。ワイドスコープの迫力、壮大なスケール。同時にフロンティア精神とは何だったのか、人間とはを問う。

「八月の……」は原爆がテーマ。この歴史が風化するか見える現代を描きながら。原爆の時を錯綜し、雷雨の中を駆け出した主人公の祖母の後を追う四人の孫たち。その繰り返されるラストシーンがすべてを伝える。

☆ ★ ☆

これらを観て思う。なにを描くかもさることながら、どう描くか、という創造の力。「ダンス……」でもインディアンを滅ぼしていった悪いアメリカという単純な視点ではない。「八月の……」もあらゆる面で現代に触れつつ、結論としてNO！をクローズアップさせる。この視点が現実に対し迫力を持つ。

☆ ★ ☆

「概して理想を描こうとするがその中身が単純、粗雑なあまり、描こうとする理想までがエゴの現実に対してひ弱になっていないか」。作家・山田太一氏の指摘（季刊『日本のうたごえ』74号、今月発売）をあらためて思い起こす。

（純）